

綱の鬼退治

豊後浄瑠璃

入江 秀利

豊後浄瑠璃は大分縣一帯で語られた一種の郷土芸能で、おそらく明治以後に作られた語り物だろうと思います。

物語の筋は「平家物語」剣巻で、平安時代、渡辺の綱が、京都の一条戻り橋で茨城童子の腕を切り落とした有名な逸話の舞台を羅生（城）門に移しかえたものです。

豊後は幕藩時代に小藩分立であったためか、豊後浄瑠璃は地方によって異なった方言で語られたようにみられます。おおまかに県南の豊後水道沿岸部の佐伯・臼杵、西部の日田・玖珠・竹田などの熊本よりの山間部、北部の周防灘沿岸部や、北九州に近い中津・宇佐方面、東部の大分・別府・国東などと四つの地方に分けられるそうです。浄瑠璃の語り文句は、それぞれ俚言（地域の独特な言葉）や訛に特色がありますが、

外題の綱の鬼退治のモチーフは変わりません。

この浄瑠璃の語り調子は、きまった節廻しや調子はなく、一般には語り手が自身でチントン、チントンと口三味線を入れて語ったようですが、今は口三味線はなく、語り手が筋や語彙によって独自に強弱や抑揚をつけて口演したようです。

豊後浄瑠璃は、座興として演ずることが多く、滑稽や諧謔に満ち、満座の喝采得るように競って演じられました。中には名人とよばれた人もあったようです。

渡辺の綱

渡辺の綱は、嵯峨源氏の流れをくむ武者で正式の名前は源綱、といい、母方の摂津の国渡辺に住んでいたので、通称渡辺源次綱、源次綱といった。

平安時代から鎌倉時代にかけて、無法者の鬼どもが丹波の国の大江山を棲家にして京都を襲い金銀財宝を奪い若い娘達をさらうなど狼藉をはたらきました。

朝廷は摂津源氏の棟梁源頼光に鬼どもを退治するように命じました。頼光は四天王（渡辺綱・坂田公時・碓井貞光・卜部季武）をひきいて酒吞童子をはじめ鬼どもを征伐しました。渡辺綱は、四天王筆頭で剛胆で知られた豪傑でした。

屋代本「平家物語」劍卷

…中にも綱は四天王の随一なり。武蔵国の美田といふ所にて生れたりければ、美田源次とぞ申しける。

一条大宮なる所に、頼光聊か用事ありければ、綱を使者に遣はさる。夜陰に及びければ鬚切を帯かせ、馬に乗せてぞ遣はしける。

彼処に行きて尋ね、問答して帰りけるに、一条堀川の戻橋を渡りける時、東の爪に齡二十余りと見えたる女の、膚は雪の如くにて、誠に姿幽なりけるが、紅梅の打着に守懸け、佩帯の袖に経持ちて、人も具せず、只独り南へ向いてぞ行きける。綱は橋の西の爪を過ぎけるを、はたはたと叩きつつ、「やや、何地へおはする人ぞ。我らは五条わたりに侍り、頻りに夜深けて怖し。送りて給ひなんや」と馴々しげに申しければ、綱は急ぎ馬より飛び下り、「御馬に召され候へ」と言ひければ「悦しくこそ」と言ふ間に、綱は近く寄つて女房をかき抱きて馬に打乗らせて堀川の東の爪を南の方へ行きけるに、正親町へ今一二段が程打ちも出でぬ所にて、この女房後へ見向きて申しけるは、「誠には五条わたりにはさしたる用も候はず。我が住所は都の外にて候ふなり。それ迄送りて給ひなんや」と申しければ、「承り候ひぬ。何く迄も御座所へ送り

進らせ候ふべし」と言ふを聞きて、やがて厳しかりし姿を変へて、怖しげなる鬼になりて、「いざ、我が行く処は愛宕山ぞ」と言ふままに、綱がもとどりを掴みて提げて、乾の方へぞ飛び行きける。

綱は少しも騒がず件の鬚切をさつと抜き、空様に鬼が手をつと切る。綱は北野の社の廻廊の屋根の上にとつと落つ。鬼は手を切られながら愛宕へぞ飛び行く。

さて綱は廻廊より跳り下りて、もとどりに付きたる鬼が手を取りて見れば、雪の貌に引替へて、黒き事限りなし。白毛隙なく生ひ繁り銀の針を立てたるが如くなり。これを持ちて参りたりければ、頼光大きに驚き給ひ、不思議の事なりと思ひ給ひ、「清明を召せ」とて、播磨守安倍清明を召して、「如何あるべき」と問ひければ、「綱は七日の暇を賜りて慎むべし。鬼が手をば能く能く封じ置き給ふべし。祈祷には仁王経を講読せらるべし」と申しければ、そのままにぞ行なはれける。

既に六日と申しけるたそがれ時に、綱が宿所の門を敲く。「何くより」と尋ねれば、「綱が養母、渡辺にありけるが上りたり」とぞ答へける。彼の養母と申すは、綱が為には伯母なり。人して言ふは、悪しき様に心得給ふ事もやとて、門の際

まで立出でて、「適々の御上りにて候へども、七日の物忌にて候ふが、今日は六日になりぬ。明日ばかりは如何なる事候ふとも叶ふまじ。宿を召され候ふべし。明後日になりなば、入れ参らせ候ふべし」と申しければ、母はこれを聞きてさめざめと打泣きて、「力及ばぬ事どもなり。さりながら、和殿を母が生み落ししより請取りて、養ひそだてし志いかばかりと思ふらん。夜とて安く寝ねもせず。濡れたる所に我は臥し、乾ける所に和殿を置き、四つや五つになるまでは、荒き風にも当てじとして、いつか我が子の成長して、人に勝れて好からん事を見ばや、聞かばやと思ひつつ、夜昼願ひし甲斐ありて、撰津守殿御内には、美田源次といひつれば、肩を並ぶる者もなし。上にも下にも誉められぬれば、悦とのみこそ思ひつれ、都鄙遼遠の路なれば常に上の欺きなれ。見ばや見えばやと、恋しと思ふこそ親子の中の欺きなれ。この程打ち続き夢見も悪しく侍れば、覚束なく思はれて、渡辺より上りたれども、門の内へも入れられず。親とも思はれぬ我が身の、子と恋しきこそはかなけれ」綱は道理に責められて門を開きて入れにけり。

母は悦びて来し方行く末の物語し、「さて七日の齋と言ひつるは何事にてありけるぞ」と問ひければ、隠すべき事なら

ねばありの儘にぞ語りける。母これを聞き、「扱は重き慎みにてありけるぞや。左程の事とも知らず恨みけるこそ悔しけれ。さりながら親は守りにてあるなれば別の事はよもあらじ。鬼の手といふなるは何なる物にてあるやらん、見ばや」とこそ申されけれ。綱、答へて曰く、「安き事にて候へども、固く封じて侍れば、七日過ぎまでは叶ふまじ、明日暮れて候はば見参に入れ候ふべし」母の曰く、「よしよし、さては見ずとても事の欠くべき事ならず。我は又この暁は夜をこめて下るべし」と恨み顔に見えければ、封じたりつる鬼の手を取り出だし、養母の前にぞ置きたりける。

母、打返し打返しこれを見て、「あな怖しや。鬼の手といふ物がかかる物にてありけるや」と言ひてさし置く様にて、立ちざまに「これは我が手なれば取るぞよ」と言ふままに恐ろしげなる鬼になりて、空に上りて破風の下を蹴破りて虚に光りて失せにけり：（要約文末）

ふにんぶんこ
不忍文庫の蔵書印があり、文庫の持ち主であった屋代弘賢という江戸時代の人に因んで名付けられました。

あべのせいめい
安倍清明は平安時代の陰陽師で、鎌倉時代から明治時代初めまで陰陽寮を統括した安倍氏の祖です。

豊後浄瑠璃 (上段が語り、下段が標準語)

こりやあんた 豊後浄瑠璃ちゆうちな
わしどおんくにん ケツロクくんじょうが
昔かるこんかた しゃつちかたち聞かせち
よろくうだもんどな おもしろいか おもしろねえか
そりやわしんしつたこつちやあねえ まあいっぺん
誰ん彼んよんじゆうじ見ち 笑いてえごたつたら
かつちい笑いな おこりてえごたつたら
かつちい怒るがいいわな

さてん さてん
昔々 みなもとんれえこおん けれえに
渡辺ん綱ちうち 上んでえかり 下んでえにかけち
あつちあられん めえらしい ついいやつが あつち
夕べんよんよあけん鐘ん なりはためきやあ
くるつとおけち うらんため池へ いっち
つるう のんぼりくんだり こきあろうち もどつちきち
ゆうべんのこりん ひやずうしいを ものの五六ぺえも
べらべらとうちくるうち がたがたせんちんにはしりくうじ

これは貴方 豊後浄瑠璃と云うて
私達の国(故郷)の 馬鹿者達が
昔から今まで どうしても語つて聞かせて
喜んだものです 面白いか 面白くないか
それは私の知つたことではない まあ一遍
誰も彼も呼んでみて 笑いたかつたら
勝手に笑いなさい 怒りたかつたら
勝手に怒りなさい

さても さても
むかし むかし 源頼光の家来に
渡辺の綱という 上の台から 下の台にかけて
在つて在り得ない 珍しい(たいへん) 強い奴があつて
夕べの夜明けの鐘が 鳴り響けば
くるりと起きて 裏の溜め池へ行つて
顔を上へ下へと 掻き洗つて 帰つてきて
昨夜の残りの 冷雑炊を ものの五六杯も
ぺろぺろと食べて がたがたと雪隠に走り込んで

くすう小山んごつう 左巻きいたれこうじ
もどつちきち けれえんへこすけ けつちけおこし
わが げんこぐちい 駄あ まわせちいやあ
なんどんすまかる かかんおへまんやたあ およぎでちい
つなやん つなやん こん節季んせわしいにい
寺ん方丈さんさい ゆかんとこりいおめえどうが いっち
何するかな こん米んたけえに昼飯やてえちやらんぞな
ちいやあ 綱んやたあ 「ろくなこついな
わがしつたこつちやねえ」ちゆうち おへまんけつう
けつちけあぐりやあ おへまんやたあ あおむきい
ひくりけえつち くせえへをぶつとたれた
綱んやたあ そりから うめへのつち 羅生門に行きや
かじゃ 吹く吹く 馬あいななく
いこうつとすりゃ どちどち もどろつとすりゃ どちどち
ゆこんもどろんなつちくせえ
やんがちんころ 鬼やくりいくみいのつち あらわれ
綱んかぶとんしころう がつと ひつつこうだ
綱んやたあ 「わが でたか」ちゆうち
家重代の鰯丸腰んだん平 だた引きにいじ
切るる切れんな 鍛冶屋ん向打がしつちよる

大便を小山のように 左巻きにたれ込んで
帰ってきて 家来の兵子助を蹴おこして
お前は 玄関口に馬を廻せといえば
納戸の奥から 妻のおへまが走ってきて
「綱さん 綱さんこの年末の忙しい時に
お寺の方丈さんでさえ行かぬ所に お前さんが行って
何をするかえ この米の高いときに 昼飯は炊いてあげんよ」
というと 綱は「つまらんことをいうな
お前のしつたことではない」といって おへまの尻を
蹴上げれば おへまは仰向きに
ひっくり返って臭い尻をブツと放った
綱はそれから馬に乗って 羅生門行くと
風は 吹く吹く 馬はいななく
行こうとすればひよろひよろ 戻ろうとすればひよろひよろ
行こうも戻ろうもできはしない
やがて 鬼は黒雲にのつて あらわれ
綱の兜のしころをがつつと掴んだ
綱の奴は「お前出たか」と云つて
家重代の鰯丸という腰の太刀をひき抜いて
切れる切れないかは鍛冶屋の向打ちが知っている

光れ光れちゅうち 振り廻しゃ

鬼んうじゃあ ころっと おてた

鬼んいやたあ いてえいてえちゅうち

「綱 わが うびいちよけ こんかたきや

つうかつ はつかつたたんうちい とつちやる」ちゅうち

黒くみい のつち にげうせにけり

そりかり つうかつ はつかつたたんうちに

鬼や おべえけえばけち げとうはいち

からん ころんと やつちきち

「綱 わがおじいもん てえじたちゅうじゃねえか

めえらしい洛中洛げえの 評判じゃねえか

そりゆう おりい 見しい」ちゅやあ

綱んやたあ見せんちゅう ばばんやたあ見せなりいちゅう

綱んやたあ とうとう図にのりくりやがつち

納戸のすまん唐櫃かり 鬼んうじゅう 持つちきち

「お婆そおれ こりゆ見さつせえ」つうち さい出しゃ

婆んやたあ うんが腕と くらべち見ち

「こりうこりう こりじゃあらこそ」ちゅうち

そんうじゅう持つち 黒くみいのつち

けむり抜きん穴かる 逃げうせにけり

光れ光れ」といって振り廻すと

鬼の腕はころっと落ちた

鬼の奴は 痛い痛いと言つて

「綱よ お前 覚えておけ この仇は

十日も 二十日もたたぬ内に取つてやる」と云つて

黒雲に乗つて 逃げ失せにけり

それから 十日か二十日もたたぬ内に

鬼はお婆に化けて 下駄をはいて

カラン コロンと やつて来て

「綱よ お前はおそろしい者を退治したというではないか

珍しい(たいへん)洛中洛外の評判になっているではないか

それを私に見せてくれ」と云うと

綱は見せないと言う 婆は見せよという

綱は とうとう図に乗つてしまつて

納戸の奥の唐櫃から 鬼の腕を持つてきて

お婆さん そら これ見なさい」と云つて差し出したら

婆のやつは 自分の腕とくらべ見て

「これだ これだ これに違いない」と云つて

その腕をもつて 黒雲に乗つて

煙ぬきの穴から逃げ去つてしまつた

綱んやたあ はかられたか くやしいちゅうち
なみづう どんどん なげえち
裏ん石うしい かみちいち
男泣きにぞ 泣きにけり

「一条戻橋にて髭切丸の太刀で茨城童子の腕を斬」 国芳画

豊後浄瑠璃は、先に述べたように県下各地域でそれぞれの方言で語られてきました。意外にも北原白秋が著書の『季節の窓』に「渡邊綱 鬼退治」を取り上げています。語りは他の浄瑠璃と変わらず豊後の方言を用いモチーフは同じですが、ただ白秋の鬼退治の場所は、羅生門ではなく大江山になっています。

他の語りのうち、クライマックスの羅生門で鬼の腕を斬るくだりと 婆に化けた茨城童子が腕を奪い返すくだりを上げおきます。

その一

あたごん山えなりぬれば うまあいもなく
かぜやふく すさまじうぞ見えにける

綱は「計られたか くやしい」といって
涙を どんどん 流して
裏の石臼にかみついて
男泣きに泣きました



愛宕の山へ 来たら 馬はいもなく
風は吹く すさましく見えた

かかるとこりい 黒雲ん中かゝる 何とんかんとん
知れんやつが 大きなうぢう によきとさしでえち
綱んかぶとん しこるう ぐいとひつつこうだ
行かうどちすりやどちどち 戻らうどちすりやよちよち
行うん もどろん なつちくせえ 綱あ もとより
えれえやつなら 腰のだんびろう どたびきにいち
切る切れんな かじやい 知つちよる 光れ光れちうち
ふりくりまええち 鬼んうぢうなりくびかる 切りおとしや
鬼あ うういな なきうあげち 逃げうした

二日ん 三日ん たたんうちい ばばいりにけり
「綱わりや えれえちがろう したちゆうのう
そん 鬼んうぢちゆうもぬう 見せなりい」
ちうつ 綱あ「いんげえ いんげえ」見せんちう
「そう云わんちゆうつ 見せなありい」ちうつ
綱あ図に乗りくりあがつち なんどんすみん
古櫃んなかかる でえちきち 見せた
「鬼んうぢちゆうもなあ 赤うじ 黒うじ 毛がはえち
うらさきあ むけくりあがちよるのう おお これこそ
おれが うぜじゃあ」ちうち 煙り出しうふきにいち

そんなところに 黒雲の中かゝる 何ともかにとも
知れない奴が 大きな腕を によきとさしだして
綱の兜の しころを ぐつとひつかんだ
行かうとすればどちどち 戻らうとすればよちよちよち
行こうも 戻らうもならない 綱はもとから
えらい（強い）奴だから 腰の刀を 引き抜いて
切れる切れんは 鍛冶屋が知っている 光れ光れと云うて
振りまわして 鬼の腕をつけもとから 切り落とせば
鬼は 大きな泣き声をあげて 逃げ失せました

二日も三日もたたぬうちに 婆がやってきた
「綱よ お前はえらい手柄を立てたぞうだね
その 鬼の腕というものをみせなさい
と云うと 綱は「否 否」見せないと云う
「そう云わずに見せなさい」と云うと
綱は図に乗って 納戸の隅の
古櫃の中かゝら出して来て見せた
「鬼の腕というものは 赤くて黒くて 毛が生えて
うらさきはむけあがつているなあ おお これこそ
俺の腕だ」と云って 煙り出しをふき抜いて

どことむなう逃げ失せた

綱あ 「はかられたか ざんねんぢゃ」 ちうちかまちい

男泣きにぞ 泣きにける

何処ともなく逃げ失せた

綱は 「はかられたか 残念だと云つて

男泣きに 泣きました

その二

…早羅生門になりぬれば 馬あ打つちえむ こづいちえむ
行ちえくさえ あつちにやぐわたぐわた

こつちにやぐわたぐわた 綱も 何じえむ 此処ぐ

うさんくせえとこるちうち まなくう

八方にくばつちよるとこるい 雲ん原かり さざえんやうな
ちえをでえち 綱んだぶそをぐわしと掴みあ 綱むたまらん

親重でえ傳はりもの ぼうぶらん蔓切丸う

ひこずり抜いち 切るる切れきれんな 鍛冶屋ん

打つちようん 研ぎようん 勾こうべえん理屈のぐはええによる

光れ 光れちゆうち 鬼んかいなをぐわしと斬りあ

鬼あ きやあきやあちうち 黒くむう さして

消え失せたり 綱ぐ 腰の浅黄の風呂敷う取りでえち

鬼のかひなを ひつつみ 背中へ横がりいにひつかるうち

我が家をさしちえ 帰りけり

早くも 羅生門にやってきたら 馬は打つても こ突いても

行きはしない あちらにはぐわたぐわた

此方にはぐわたぐわた 綱も 何でも 此処が

胡散臭い処と云つて 眼を

八方に配つている処に 雲の中から 榮螺のような
手を出して 綱の髻をぐわし掴めば 綱はたまらぬ

親重代の傳りものの 南瓜の蔓切丸を

引き抜いて 切れるか切れぬかは 鍛冶屋の

打ちかた 研ぎかた 勾配の 理屈の具合による

光れ光れと云つて 鬼の腕をぐわしと斬ると

鬼は きやあきやあ云つて 黒雲を さして

消え失せた 綱は 腰の浅黄の風呂敷を取り出して

鬼の腕を包み 背中に横かゝるいに担いで

我が家をさして 帰りました

綱ぐ家に戻つちえ来りあ 隣のをばじようぐやつちえ来ちえ
「綱 わく途方もねえちえがろう したちうぐ おりい
見せち呉るることあなるめえか」 ちやあ 綱むおばじようん
云うことなら 見せざあなるめえか ちうち 納戸ん
ふるわんびつの底かり 桐ん七重ん箱う取りでえち
「まあ見なはりい」 ちうち 見すりあ 「ううんこりやまあ
毛のむぐむぐと生へちよるものう こりくさおりがかいな
ちうち 烟出しかりふいと出りあ 綱あたばかれた ちうち
ゆるりがまちい がぶしりちいち男泣きにぞ 泣きにける

一八頁から二二頁にあげた豊後浄瑠璃は、昭和二五年NHKが三〇周年記念番組で放送した、いわば大分県標準方言?の語りです。その一、その二は、大分師範学校が昭和八年に発行した「大分縣方言考」から抽出したものです。

明治三五年三月に文部省は省内に、国語調査委員会を設けて、「方言を調査して、標準語を選定すること」を決議して、各府県に、取調の方法と取調の書き方を指示して調査を委託しました。標準語は東京語を中心にして中流以上の教育のある家庭に行われている言葉を加えたものになりました。文部省

綱が家に戻つて来れば 隣の叔母さんがやつて来て
綱よ お前は途方もない手柄をしたというが 私に
見せて呉れる事にはなるまいか と云えば 綱は伯母の
云うことなら 見せねばなるまいか と云つて納戸の
ふるわん櫃?の底から 桐の七重の箱を取り出して
「まあ見なさい」と云つて見せれば「ううんこれはまあ
毛がむじゃむじゃはえているものだ これこそが俺の腕」
云つて烟出しからブイと出れば 綱はたばかれたと云つて
囲炉裏框にかぶりついて 男泣きに泣ききました

は方言の調査分析を行ういっぽう、国定教科書「尋常小字国語読本」を使って方言を矯正して標準語による言語教育を普及しました。

標準語教育が普及し始めたころ、ある人が鹿児島で老人に道を尋ねたらさっぱり通じないので、小学生に頼んだらよく分かった。と云う報告がありました。現在では方言の分かる人は「じいさん、ばあさん」になってしまいました。

もとより方言は標準語より古い歴史があり、古語や雅語、俗語が永い時間をかけて語られているうちに「ことば」とし

て微妙に変化し、独特の意味をもってその地方に定着したものでしよう。

「訛り（方言）は国の手形」といいますが、方言にたいするノスタルジーは可笑しおかしさとともに心の中に根強く残っています。

ふるさとの 訛なつかし停車場の

人ごみの中に そを聴きにゆく 啄木

参考 「大分県方言考」「大分弁」（ウエキペディア）

屋代本「平家物語」劔巻

：源頼光の四天王の一人渡辺綱が頼光に一条大宮へ行く用を頼まれた。夜に馬を走らせ、一条堀川の戻橋を渡った時、二十歳ほどで肌が雪のように美しい女に出会った。

紅梅の打衣（上着）に帯を掛け、お守り袋が掛かっており、衣の袖の先に経持って、誰もお供のものはいなくて、ひとりで南に向かっていた。綱は、「夜も更けて怖ろしいでしょうから送りましたよ」と言っつて女を抱えて馬に乗せた。

家まで送ってほしいというという女の申し出に綱が承知し

た次の瞬間、女はもの怖ろしげな鬼に成って、「さあ、わたしの行くところは愛宕山（天狗、鬼神が住んだと伝えられている）だ」と言い、綱の髻を掴み飛んだ。

綱は少しも動じず、浮遊しながら鬚切という名の刀を抜き、鬼の腕ごと切ってしまった。綱は北の天満宮に落下し、鬼は手を切られながらも愛宕山に飛んでいった。

はじめ女の腕を見たときは雪のような肌だと思ったが、その切った腕を見ると色黒くて土のようで、太くて白い毛が隙間なく生えて銀の針を立てているかのようにチクチクしている。

この腕を頼光のもとに持って参ると、頼光は大いに驚いて陰陽師安倍晴明を呼んだ。陰陽師は綱に、「鬼が腕を取り戻しにくるので、七日間は物忌みをし誰にも会わず、仁王経を講読しなさい」と申しつけた。

そうして、六日経った黄昏時に、養母である伯母が尋ねてきた。綱は、「物忌み中なので明日なら入れます」と言ったが、伯母はさめざめと泣いて、「情けない。幼い頃は夜も寝ずに貴方を育て、いつしか立派に仕事をし、ずっと会いたいと恋しく思っていたのにこんな仕打ちはひどい」などといわれ、綱は誠にそのとおりだと思い、門を開けた。

伯母がどうして物忌みをしているのか尋ねたので事情を説明した。伯母はその鬼の腕を見たいと言い、綱は明日なら構わないと言ったが、また道理を説き伏せられ、封じていた鬼の手を伯母の前に取り出して見せた。

伯母はそれをよく見て、「これは私の手だから取って行くぞ」と言って怖ろしい鬼の姿になって飛び出していった。綱は鬼の腕を切った刀を後、「鬼丸」と名づけた。



平成 27 年・元禄時代の豊後の国の絵図面に見入る参加者（臼杵市歴史資料館）